

教職大学院

Newsletter No. 136

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科 since2008.4 2020.6.19

実践し省察するコミュニティ

実践研究 福井ラウンドテーブル 2020

VIRTUAL (Online) SUMMER SESSIONS 特集号

実践し
省察する
コミュニティ

Round Tables:
Summer Sessions 2020
for Reflective Practice
and Organizational Learning
At University of Fukui

For Communities of Practice and Reflection since 2001

実践研究 福井ラウンドテーブル
2020 Summer Sessions
20(sat) 13:00-17:40
21(sun) 10:00-14:10
Cyber Space Co-inquiry and Reflection with Zoom

探究する学びを実現する教師
教師を支える教職大学院
教師の実践力を培う学校拠点の実践研究

学校と大学/
実践と研究を結ぶ
新しい実践研究組織とそのネットワーク

2020.6.20-21

教師教育改革コラボレーション/福井大学連合教職大学院
福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科
兵庫 社会教育実践研究フォーラム

内容

- ラウンドテーブルによるこそ (1)
実践し省察するコミュニティ
実践研究福井 ラウンドテーブル
全体スケジュール (3)
ZoneA 学校 (4)
ZoneB 1 教師教育 (5)
ZoneB 2 教員養成 (5)
ZoneC コミュニティ (6)
ZoneD 授業研究 (7)
ZoneE 探究 (8)
Round Table Cross Sessions (10)
実践し省察するコミュニティを結び支える(10)
ラウンドテーブルの歩み (12)
福井大学連合教職大学院が実践する教育改革
グローバルコミュニティへの誘い (15)
アーカイブ (17)

2001年3月、21世紀とともに始まった実践研究福井ラウンドテーブルは、今回2020年6月の開催をもって39回を迎えます。今回のラウンドテーブルも、多様な実践と省察との出会いに満ちています。今回は、オンライン（Zoom）にてVIRTUAL (Online) SUMMER SESSIONSを開催いたします。6月20日（土）には6つのテーマに即したZONE SESSIONS、6月21日（日）には小グループ（4名程度）で実践を丁寧に語り聴き合うROUND TABLE CROSS SESSIONSを行います。

【Zoomを用いたオンラインのバーチャルセッションについて】

参加申込時の登録メールアドレス宛に以下の日程でご連絡差し上げます。

- (1) 6月19日(金): 6月20日(土)申込 ZONE ごとの Zoom URL をお知らせします。
(2) 6月20日(土): 6月21日(日)ラウンドテーブルの Zoom URL をお知らせします。

*Zoom URL が未受信の場合には dpdtfukui@yahoo.co.jp 宛に所属・氏名を添えてご連絡ください。

*両日ともに Zoom ブレイクアウトルームの設定がございますので、できるだけ「Zoom 接続開始」時間に Zoom ミーティングに入室してください。運営サポートにご協力をお願いします。

この2日間が、お互いの成長を支え合い、大人も子どもも育ち合うコミュニティになることを、スタッフ一同大いに期待しております。

オンラインでのラウンドテーブルの企図に寄せて

福井大学大学院福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科長
柳 澤 昌 一

2000 年に出発した実践研究福井ラウンドテーブルにとって、この 2020 年夏のセッションは、大きな転機となると思います。

3 月、次第にコロナウィルス感染をめぐる状況が世界的にも悪化の一途をたどり、大学においても卒業式・入学式をはじめ今後半年の規模の大きなイベントの中止が早々と決まっていくなかで、6 月のラウンドテーブルの開催についての判断が問われることになりました。少人数で、互いの実践の長いプロセスを聞き語り合うラウンドテーブルのクロスセッションは、このウィルス感染下ではもっとも避けなければならない「三密」状況の典型ということになり、通常の形での開催はまったく見込めないことは明らかでした。

他方、教職大学院にとって、また学校での取り組みを重ね探究を進めていく年間サイクルの中で、年 2 回のラウンドテーブルにおける交流と相互確認が、互いの困難な状況の中での実践を励まし支える不可欠な基盤であることもまた確かなことであり、ラウンドテーブルを中止するような事態は、とりわけ新しい地域や学校での取り組みが始まる今年度において、そして何よりコロナ状況という未曾有の困難に手探りで取り組むことが求められる状況であるからこそ、選択しがたいことでもありました。

3 月なかばまではマスクと距離の確保、会場のさらなる分散等の手立ても考えましたが、なかば以後の状況の中で、オンラインでラウンドテーブルを進めていく方向を目指していくことになりました。

オンラインで、ラウンドテーブルの大切にしてきた少人数でじっくり互いの実践の展開を聴き合い共有するプロセスをどのようにして確保していくか。4 月以後の教職大学院におけるカンファレンス準備会、そして 5 月の合同カンファレンス、そして学部卒院生の金曜カンファレンスの取り組みを通して試行錯誤を重ねてきました。一方では、オンラインでも交流を深めることができるという実感を多くの皆さんと、驚きと共に共有する一方、初めて取り組むオンラインミーティングのために機器やネットワークの調整や配備、そして新しい取り組みへの不安も重なって、準備・運営の中心となった皆さんには大きな負担と心労をおかけすることになってしまいました。コロナ禍において、日常の前提、組織の編成そのものが揺らぎ、変更を求められ、困難と不安の状況にある中で、敢えてこの企図に参加して下さる皆さん、そしてそうした状況の中で、準備と運営に取り組んでくださっている皆さんに深く感謝致します。

今回、おそらく 500 名を超える皆さんと、オンラインでの、地域を越えた長時間の実践交流というこれまでに前例のないセッションに挑むこととなります。遠く沖縄伊良部島、そして札幌、またシアトル、シンガポールをはじめ海外からの参加も予定されています。遠大な距離を超えて互いの取り組みを聴き合い、語り合う。ラウンドテーブルが新しい次元へと展開していくこととなります。

まったく新しい企図。まちがいなく試行錯誤の連続となると思います。その錯誤を踏まえてまた一歩ずつ、まったく新しいコミュニケーションの時空へと進んでいきたいと思います。どうかよろしくお願いいたします。

実践研究

福井ラウンドテーブル

2020 VIRTUAL (Online) SUMMER SESSIONS

6/20(sat) 13:00-17:00 (zoom 接続開始 12:00)

内容は ZONE によって異なります。オンライン・ポスターセッション、ウェビナー形式のシンポジウム、ワークショップ、フォーラム等を実施します。

学校・教育・地域を考える6つのアプローチ

- A 学校:21 世紀の学びを実践する教師の学習コミュニティを培う
ーコロナ対応を通じて学校の在り方を探るー
- B1 教師教育:働き方改革と学び合う学校づくり
ー組織・コミュニティ・カリキュラムのマネジメントー
- B2 教員養成:対人援助専門職としての学びのプロセス
ー非対面状況での実践の課題と新たな可能性ー
- C コミュニティ:持続可能なコミュニティをコーディネートする
ーコロナ禍状況におけるコミュニティの学びの展望を拓くー
- D 授業研究:子どもと教師の学びを支えるために授業研究・保育研究をいかに組織するか
- E 探究:学びと教えるのニューノーマルを協働探究する

17:30-18:10 省察的実践学会総会

今回は延期となりました。参加申し込みされた皆様には申し訳ありません。次回と今後については、ホームページやメール等でご案内いたします。

6/21(sun) 10:00-14:10 (zoom 接続開始 9:00)

ROUND TABLE CROSS SESSIONS 10:00-14:10

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

地域や職場で自分たちの実践をじっくり跡づけ、その省察をふまえて実践を編み直していく。地域・職場を大人同士が実践を通して学び合う協働体（コミュニティ）に変えていく。その中で一人一人が、省察的で主体的な実践者としての力を培っていく。そうした地道な取り組みが少しずつ蓄積されてきています。

試行錯誤を重ねながら大切に進められてきているそうした取り組みを、より広く伝え合い、じっくり展開を聞き取り、学び合う場を作りたいと思います。

9:00-10:00	接続
10:00-10:10	オリエンテーション
10:10-10:30	自己紹介&アイスブレイク
10:30-12:10	報告Ⅰ ～ランチ・ブレイク～
12:40-14:00	報告Ⅱ
14:00-14:10	リフレクション

ラウンドテーブルでは少人数で互いの実践の長い展開を聴き合い、考え合うことを目的としています。

そのため 10:00-14:10 の全日程を 4 人程度の固定メンバーの小グループでの協働探究として進めます。
原則として 10:00-14:10 の全日程に参加できるメンバーで進めますので、よろしくお願いいたします。

6/20 (sat) 13:00-17:00 (zoom 接続開始 12:00)

学校・教育・地域を考える6つのアプローチ

Zone A 学校

21世紀の学びを実践する教師の学習コミュニティを培う

ーコロナ対応を通じて学びや学校の在り方を探るー

Zone A ではこれまで、「専門職の学び合うコミュニティ (Professional Learning Communities)」を培う
学校改革のビジョンにもとづき、「21 世紀の学びを実践する教師の学習コミュニティを培う」というテーマを
掲げ、学校が持続発展していくための教師協働の在り方について議論を積み重ねてきました。今回の実践研究
福井ラウンドテーブル 2020 VIRTUAL (Online) Summer Sessions ではコロナウイルスが世界的に感染拡大
する現状に鑑み、この課題にそれぞれの現場で私たちがどう向き合っているかを共有します。臨時休業中の
様々な対応から何が見えてきたか、これからの学びや学校はいかにあるべきか、学び合うコミュニティをどの
ようにデザインしていくか、参加者のみなさまとともに協働探究していきます。特にシンポジウムでは、オン
ラインでの「21 世紀の学び」の在り方についても確認しながら対話と議論を重ね、これまで Zone A で蓄積し
てきた知見をさらに前進させていきます。

Connection 12:00-13:00 接続

Orientation 13:00-13:10 オリエンテーション

Session I 13:10-15:00 Webinar Symposiums 21 世紀の学びを実践する教師の学習コミュニティを培う

<シンポジスト>

富山市立堀川小学校 政二 亮介

伊那市立伊那小学校 宮川 達也

市立札幌大通高等学校 西野 功泰

<コーディネーター>

福井大学連合教職大学院 小林 和雄

福井大学連合教職大学院 王 林鋒

Session II

Webinar Breakout Rooms

Group1 15:10-16:00

Group2 16:10-17:00

Session I の議論に基づき、参加者それぞれの学校づくりの長い実践を共有し、新たな出会いと協働を編み込んでいきます。小グループ形式で協働を編み込み、実践をデザインし、文化を生み出していきます。途中でグループ編成を替えて語り合います。

Zone B1 教師教育

働き方改革と学び合う学校づくり

ー組織・コミュニティ・カリキュラムのマネジメントー

今日の学校教育には、これからの変化の激しい時代において持続可能な社会の担い手となる子どもたちの資質・能力を育むため、主体的・対話的で深い学びの実現など、教育の質的転換・向上が求められています。また、教員の大量退職に伴い、若い世代の教員を支え育てる組織づくりも必要とされるなど、学校は大きな変革のなかにあります。他方で、教員の働き方改革も急務とされています。こうした状況のなかで教育に携わる者の多くは、教育の質的向上と働き方改革とは一方を推進すれば他方が停滞するというディレンマに悩まされているのではないのでしょうか。

Zone B1 では、現状を克服し、教育の質的向上と働き方改革との両立を目指して、自治体における具体的な事例なども踏まえながら、行事の精選や教員の会議の削減などに止まらず、教師の働き方改革を実現しつつ教育の質的向上を図るためのカリキュラムマネジメントや教師が学び合うコミュニティとしての学校のあり方について展望を拓いていきます。

コロナ禍の今日、各学校や教育機関等においては、子どもの学びを保障するという問題解決に向けて、ICTの活用などさまざまな実践の工夫が教師の協働によって行われています。今回教師教育の Zone B1 では、オンライン会議システム（Zoom）を使ってそれらを広く共有し、皆さんのこれからの実践に生かすことができると考えています。多くの皆さんの参加をお待ちしています。

Connection 12:00-13:00 接続

Orientation 13:00-13:10 ガイダンス

Session I 13:10-15:20 Symposium

＜話題提供＞ 福井県教育庁学校教育監

清川 亨

＜実践報告＞ 岐阜聖徳学園大学附属中学校校長

宮島 康広

福井県立丸岡高等学校校長

島田 芳秀

福井大学連合教職大学院教授

牧田 菊

＜コメンテーター＞ 静岡大学教育学部・大学院教育学研究科教授

梅澤 収

（敬称略）

今日の困難な状況のなかで教育の質的向上や人材育成と働き方改革との両立を目指した実践を共有します。

Session II 15:20-17:00 Forums

実践報告を踏まえ、参加者それぞれが今後の実践にどのように生かすことができるか、小グループで協議します。

Zone B2 教員養成

対人援助専門職としての学びのプロセス

ー非対面状況での実践の課題と新たな可能性ー

新型コロナウイルス感染拡大によるパンデミック状況の中、大学の授業も従来のやり方では実施できなくなっている。教員、看護師、保育士、心理職等の対人援助専門職の養成は、実習を始めとした対面での学習の割合が特に高かったため、対面での授業ができない状況は深刻な問題になっている。

そのような中、専門職養成を担う大学では、オンラインでの遠隔授業に取り組むなど、問題解決に向けてさまざまな工夫が重ねられている。大学ごとに多様な制約を抱えながらも、実施できることを実施できることから始め、これまでになかった発想・方法での新たな教育実践が生まれつつある。

2020年2月の本ラウンドテーブルにおいて、教員、看護師、保育士、心理職等の対人援助専門職としての学びのプロセスを探ってきた Zone B2 では、対人援助専門職養成において、実践の状況を的確に読み取る「アセスメント」と、それを下支えする「省察」、そして省察の深まりと広がりを支える「仲間関係（同僚性・協働性）」を初学者のうちから体験しておくことの重要性が示された。

今回のラウンドテーブルでは、これら3つの知見を踏まえながら、現在のコロナ禍において、たとえ対面で授業ができないオンライン状況であっても、対人援助の専門職養成を担う大学が保障しなければならない教育とは何なのか、また、それをどのように行うのか、そして、遠隔授業というこれまでになかった状況から、図らずもどのような新たな教育実践の可能性が見いだされつつあるのかに注目し、このような状況だからこそ鮮明になる専門職養成の本質を参加者の皆様と探っていきたい。

Connection 12:00-13:00 接続

Orientation 13:00-13:10 オリエンテーション

Session I 13:10-14:40 Symposium

〈シンポジスト〉 福井県立大学 看護福祉学部 看護学科 教授 大川 洋子

仁愛女子短期大学 幼児教育学科 准教授 増田 翼

〈コーディネーター〉 福井大学 連合教職開発研究科 准教諭 廣澤 愛子

Session II 15:20-17:00 Forums グループ・セッション

Session I での議論を踏まえつつ、小グループ形式での語り合いによって参加者それぞれの実践を共有し、非対面状況下における実践の課題と新たな可能性を参加者の皆様と探っていきたいと思います。

Zone C コミュニティ

持続可能なコミュニティをコーディネートする

ーコロナ禍状況におけるコミュニティの学びの展望を拓くー

Zone C では、持続可能なコミュニティをコーディネートするというメインテーマを様々な角度から検討してきました。前回の2月には、地域の異なる世代の人々、様々な状況の人々が集まることを通して、コミュニティをともに支え合う集団の力を育む実践の報告から「地域のこれからの担い手をいかに育てるか」を考えました。しかし、今のコロナ禍の閉ざされた状況では、これまで一緒に活動していた人たちの様子や、地域の仲間の様子を知ることさえままなりません。そこで、せめてオンラインを通して、自分たちの地域やコミュニティの今を聴き合い、言葉にならない困難を一緒に声にし、この状況の中で一歩踏み出す手がかりを探り合い、これまでの自分たちの実践の中にこそある学びに光をあてたいと思います。

具体的には、これまでシンポジウム形式で会をつくってきましたが、今回は、お互いの状況や情報を共有し合うことをメインにしたいと考えています。オンライン・ツールで参加することのハードルも、できる限り取りのぞく工夫をしていきます。そして、準備の過程では、参加者の皆さんから、事前にアンケートやオンラインの状況共有会で、様々な声をお寄せいただき、一緒にこの会をつくっています。

Connection 12:00-13:00 接続

Orientation 13:00-13:10 オリエンテーション

Session I 13:10-13:50 話題提供

小グループでの話し合いの前に、数人の方たちに、実践やコミュニティの状況について、全体で共有していただきます。

Session II 14:10-16:10 フォーラム 小グループでの話し合い

13:50-14:50 小グループ①

14:50-15:00 休憩

15:20-16:20 小グループ②

16:20-16:30 休憩

Session III 16:10-17:00 全体での共有

Zone D 授業研究

子どもと教師の学びを支えるために授業研究・保育研究をいかに組織するか

これまでZone D では、「子どもと教師の学びを支えるために授業研究・保育研究をいかに組織するか」というテーマで、特に探究的な学習を支えるためにどのように授業研究・保育研究を組織していくと良いのか考えてきました。今回は、新型コロナウイルス感染症の影響から、各学校において遠隔授業の取り組みが進められつつある状況に鑑み、「遠隔授業における教師の協働と子どもの主体的な学び」に焦点を当て、各学校でどのような実践が行われてきたか、またその実践はどのような教員コミュニティに支えられていたのかについて考えます。

シンポジウムでは、「遠隔授業における教師の協働と子どもの主体的な学び」について、福井大学附属義務教育学校前期課程での双方向型遠隔授業の取り組み、アメリカやシンガポールの海外の事例から、そこでの教師の協働と子どもの主体的な学び、さらにそれら実践を支える授業研究や保育研究について探っていきます。

フォーラムでは、シンポジウムで出てきた問題提起を踏まえて、保幼小・中高・特別支援という3領域に分かれ、各領域での話題提供や参加者の実践を手がかりに、参加者がそれぞれの校種や領域で具体的に実践を捉え直していきます。

Connection 12:00-13:00 接続

Session I 13:00-15:00 Symposiums 遠隔授業における教師の協働と子どもの主体的な学び

〈シンポジスト〉 アメリカ シアトル クイーンアン小学校 教諭 エリザベス ハートマン 氏

福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程 教諭 澤本 恵 氏

シンガポール テマセックジュニアカレッジ 教諭 ブーン・ウィ・ナング 氏

〈コーディネーター〉 福井市安居中学校 校長 牧田 秀昭 氏

福井大学連合教職開発研究科 特任教授 三田村 彰 氏

Session II 15:30-17:00 Forums 「多様な授業研究・保育研究から学び合う」

A. 「保幼小の実践に学び合う」 参加者の話題提供を踏まえ、お互いの実践を交流します

B. 「中高の実践に学び合う」 福井市安居中学校 教諭 川端 康誉 氏 竹内恭平 氏
福井県立若狭高等学校 教諭 渡邊 久暢 氏

C. 「特別支援教育の実践に学び合う」 参加者がお互いの実践を交流します。

Zone E 探究

学びと教えのニューノーマルを協働探究する

ハイパーコネクティビティ⁽¹⁾と VUCA⁽²⁾の加速する世界のなかで、私たちは、ますます複雑で深刻な問題に直面しています。複雑で深刻な問題としてたとえば、気候変動による自然災害の増加、止まらない核拡散、グローバル規模の経済危機、有限資源の枯渇、ボトム・ビリオン（世界の最貧困層）の耐えがたい困窮、テロリズムの脅威、狡猾な不正取引と密売、巧妙化するサイバー犯罪、そして、新型コロナウイルス感染症拡大に象徴される未曾有のパンデミックなど、多岐にわたります。

特に、私たちは現在の新型コロナウイルス感染症パンデミックによって生じた教育の危機をのりこえ、未来に向けた個人・社会・世界のウェル・ビーイングを追い求め、実現していく必要があります。

そこで、この新しいセクション **Zone E 探究** として、これまでの実践研究福井ラウンドテーブルで築いてきた子どもたち・若者たちと大人たちによる対等で学び合う関係を岩盤として、学びと教えの新しい常態、すなわち「ニューノーマル」をみなで考え描いていくプロジェクトを立ち上げました。

「これからどのように学ばいいのか?」「教師の役割／生徒の役割はどのように変わるのか?」「学校はいかなる学びを提供するのか?」「探究することで社会・世界にどのような貢献ができるのか?」これらの問いをみなで協働探究していきます。

このプロジェクトの企画や活動のデザインには、中高生・大学生・大学院生、各種学校の先生方、大学等の教育機関の先生方、教育支援企業の方々といった、幅広い方々のご参画をいただきたく、以下「スケジュール」に記しましたプレミーティングとプレセッションを設けました。ご都合のつく日程で、私たちとの協働の議論と学び合いにご参画くださいますと幸いに思います。

- 1) 人と人とのつながり、移住・移民、テクノロジーの自動化・AI化によるヴァーチャルなつながりが爆発的に増すこと
- 2) ビジネス用語で、現代社会の特徴を表す4つの言葉：Volatility（不安定）、Uncertainty（不確実）、Complexity（複雑）、Ambiguity（曖昧）の頭文字をとった造語。

記

- 1 スケジュール 以下の日程で6月20日(土)実践研究福井ラウンドテーブル2020 VIRTUAL SUMMER SESSIONSに向けたプレミーティング・プレセッションをWEB会議システム(Zoom)によって行います。

日程	時間	内容
5月26日(火)	17:00-18:30	キックオフ・プレミーティング
6月2日(火)	17:00-18:30	第1回プレセッション 学びと教えのニューノーマルの協働探究をはじめ テーマ：学校再開ビフォーアフター 今、生徒たちが「やりたい!」授業とは?
6月9日(火)	17:00-18:30	第2回プレセッション 学びと教えのニューノーマルの協働探究をすすめる テーマ：宿題・課題の存在理由を問い直す
6月16日(火)	17:00-18:30	第3回プレセッション 学びと教えのニューノーマルの協働探究をふかめる テーマ：エージェンシーを発揮できるテーマを選ぶ・創る
6月20日(土)	13:00-17:00	実践研究福井ラウンドテーブル2020 VIRTUAL (Online) SUMMER SESSIONS

- 2 参加申込方法 以下2つのURLからそれぞれ参加申込をお願いいたします。

プレミーティング・プレセッション <https://forms.gle/f5sVPw9PnANmEks77>

実践研究福井ラウンドテーブル <https://forms.gle/ncmLkEqw6xcuwLxd7>

申込を確認しましたら、フォームにご記入いただいたメールアドレス宛に Zoom Meeting URL 及び資料を配信いたします。

- 3 企画案 6月20日（土）実践研究福井ラウンドテーブル 2020 VIRTUAL SUMMER SESSIONS ZONE E 探究：学びと教えのニューノーマルを協働探究する は現在、以下の企画を構想中です。

● **生徒ポスターセッション STUDENTS VIRTUAL POSTER SESSIONS**

- 児童生徒を中心に、学校で行っている探究学習（プロジェクト学習）の中間報告や、学びと教えのニューノーマルへの挑戦に関するご意見を、Power Point（プレゼン）、JPEG（写真）、PDF（ペーパー）、Word（文書）などの電子データで事前に作成いただきます。
- 6月13日（土）から6月20日（土）まで、電子データのポスターをネットワーク上で掲載し、参加者は各ポスターを閲覧して、生産的コメントやアドバイスをネットワーク上の共有ファイルに書き込んでいきます。
- 6月20日（土）13:10-14:10に、ポスター発表者（チーム）と対話するセッションを行います。

● **協働探究ワークショップ COLLABORATIVE INQUIRY WORKSHOP**

- 6月20日（土）14:20-16:00プレミーティング・プレセッションを通じて、みなで企画をつくっていきます。

● **未来に向けた「学びと教えのニューノーマル」の提言とアクション・プラン
FUTURE-ORIENTED REMARK & ACTION PLAN ABOUT NEW NORMAL
IN LEARNING & TEACHING**

- 6月20日（土）16:00-17:00協働探究してきた「学びと教えのニューノーマル」の実像をむすび、これからの未来に向けた提言とアクション・プランを創造します。

- 4 お問い合わせ 本プロジェクトについてのお問い合わせは、福井大学連合教職大学院准教授・木村優 u-kimura@u-fukui.ac.jp までお願いいたします。

6/21 (sun) 10:00-14:10

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

Round Table Cross Sessions

地域や職場で自分たちの実践をじっくり跡づけ、その省察をふまえて実践を編み直していく。地域・職場を大人同士が実践を通して学び合う協働体（コミュニティ）に変えていく。その中で一人一人が、省察的で主体的な実践者としての力を培っていく。そうした地道な取り組みが少しずつ蓄積されてきています。

試行錯誤を重ねながら大切に進められてきているそうした取り組みを、より広く伝え合い、じっくり展開を聞き取り、学び合う場を作りたいと思います。

小グループで実践の展開を聴き合います。

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていきたいと思います。心に残っている場面。言葉、表情、行為。その時々を感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。

語られる展開に耳を傾け、活動の場面を共有し成長のプロセスを探っていきたいと思います。実践の過程をじっくり語り・聴き合う場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。

9:00-10:00 接続

10:00-10:10 オリエンテーション

ラウンドテーブルの意味、めざしていること、進め方について確認します。

10:10-10:30 自己紹介&アイスブレイク

それぞれが今取り組んでいること、ラウンドテーブルに期待していることを伝え合います。

10:30-12:10 報告Ⅰ

～ランチ・ブレイク～

実践の展開、そこで考えてきたことをじっくり語っていただき、その展開をたどります。話の間にも小さな確認の質問なども挟んで、やりとりしながら進めることができたと思います。

12:40-14:00 報告Ⅱ

14:00-14:10 リフレクション

報告Ⅱのあと、もし時間が許すようであれば、今日の感想をお互いに語ってグループごと会を閉じます。

ラウンドテーブル

実践し省察するコミュニティを結び支える



2009.3.26

地域も職種も異なる実践者・実践研究者が集い、小グループに分かれてテーブルを囲み、5時間近く互いの実践を跡づける報告に耳を傾ける。語られる実践の展開を追走しながら、時々の実践者の判断や配慮、実践を支える条件に問いを進める。聴き手の問いに応え、語り手は実践の状況とそこでの思考を改めて思い起こし、それを表す言葉を模索しながら語り進めていく。聴き手もその展開に学びながら、関連する自らの実践とそこでの経験・思考を語り始める。それぞれの経験が照らし合うことによって共通する構造とそれぞれの特色が浮かびあがる。

少人数で、しかも多様な専門職が集って一緒に実践の長い展開を跡づけ直すこの研究会（実践研究福井

ラウンドテーブル、以下ラウンドテーブルと略す)の構成とその意味について、この会に最初から関わってきたものの一人として改めて考えてみたい。

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

一つの授業、一つのプロジェクトも、それが生み出される背景と、それが生きて働く作用の行方まで視界に入れようとするならば、はるかに長い前後の展開を跡づけることが必要となってくる。とりわけ学習者の成長のゆるやかなプロセスを焦点とする教育実践においては、そうした長い展開から目を逸らす訳には行かない。

しかし、個々の授業や実践の検討は数多く重ねられ、また他方でより長いライフヒストリーの跡づけもまた重ねられてきてはいるが、その間にある実践の持続的な展開、実践と実践の間にある調整と成長の長いプロセスへの問いは課題のままに残されてきた。たしかに、そうならざるを得ない理由がいくつも存在している。実践をともに担っているもの同士では、つねにその状況の中にいるために、問題や課題については話し合ったとしても、実践の展開と状況を子細に語る必要性が存在していない。逆にその実践の外にしているものは、その実践から学ぼうとする場合であっても、自分の実践にすぐに活かせるような具体的な手がかりを求めがちである。そして「外から」実践に迫ろうとする「研究」は、実践の持続に見合うだけの方法も枠組みも組織も準備しえていない。長い実践の脈絡、そこにある成長のプロセスとそれを支える編成を探るためには、これまでにない実践交流の場・実践の内と外を結ぶ新しい協働の省察の場を生み出していく必要がある。実践の歩みを振り返り、その展開を跡づけ、一人ひとりの成長、自身の実践者としての歩みを問い直そうとする語り手と、その長い展開からより深く学び取ろうとする聴き手が出会う場が必要となる。ラウンドテーブルは、実践に関わる一人ひとりがそうした語り手となり、聴き手となる場を拓こうとする問い組みとして始まる。

実践と省察のサイクルとその交流の場

長い実践の展開を省察し検討することは、日々の仕事に追われるお互いにとっては容易に実現できることではない。実践の場において、実践の展開を語り合い省察するコミュニケーションを持続的に進めていく、専門職として学び合うコミュニティ (Professional Learning Communities) の実現が中心的な課題となる。そうした実践の場での省察を支えるために、福井大学教職大学院では学校拠点での実践カンファレンスを中心に据えている。そしてそうした学校での取り組みを踏まえ、月一回の合同のカンファレンス、実践を語る会を重ね、また半年ごとに集中的に実践の展開を記録化して検討する時間を作っている。月を追って、そして半年、1年、2年とそれぞれの取り組みの足取りを確かめていくなかで、それぞれの実践者の、そしてそれぞれの職場の固有のリズムで、ゆるやかに、ときに劇的に実践が展開していくことを実感し合うことになる。時々の実践の記録やカンファレンスでの語らいを、1年、そして2年と積み重ね、その記録を、長期にわたる実践の展開過程として改めてその道行き (trajectory)・脈絡を検討し直して行くなかで、厚みのある実践の現実の展開がようやく見えてくる。あれができないこれが足りないとその時々の課題を追っている目には見えない、同じところを回っているようにしか見えない実践サイクルの中にある小さな傾斜が、長い時間の展望の中でとらえ直した時に、ゆるやかな展開として像を結んでくる。自身の見方や考え方の深まり、実践の基盤にある共同関係の展開も、そうした長期にわたる展開の中にはじめて浮かびあがってくる。

しかし、長期にわたる実践省察の意味が、その渦中では実感し難いという現実はある。そうした暗中模索の中での実践と省察を支えるためにも、実践をともに歩み語り合う仲間とともに、長い実践の展開の価値を、より広い見地からより鮮明に確かめ直す場が、どうしても必要になってくる。ラウンドテーブルは、実践展開の価値をより広い視点から確かめ直す場として、実践の場での省察、そして大学院での長期的な実践研究を支える重要な支柱となっている。実践と研究の表明の場のゆたかさ、あるいは貧困さは、それが実践の真価を問う場の一つとして働くがゆえに、日々の実践と研究の深まりを支え、逆に拘束することにもなる。交流・表明の場のあり方、その構成が問われることになる。

小グループでの共同探求と開かれた交流を結ぶ

地域を越えた実践交流はこれまでも様々な組織によって取り組まれているが、交流の広がり確保と実践の探究の深まりとは、相反する要求であることもまた確かである。ラウンドテーブルは交流と探究を両立する形を模索する中で生まれてきた。いくつかの特徴的なセッションの構成がここでは取られている。

- ① 実践の長い展開を語り、聴くことを中心に据える。
- ② そのために実践の展開を語り跡づけることの出来る時間を確保する。(1 報告 60-100 分)

- ③ 実践の展開について問い交わしながら共同探求できる少人数のグループを設定する。(6名程度)
- ④ グループには多様な地域・分野の実践者・研究者が加わり、個々のコミュニティを越えたメンバーで実践を共有し跡づける。(学校教育・社会教育・看護・福祉・保育・自治・企業 ほか)
- ⑤ 小グループは個別の部屋に分かれず、他のグループと広場を共有した状況の中で進める。

多様な地域・領域のメンバーが加わったセッションでは、自分たちが当たり前の前提にしていたこと、重要ではあってもその領域ではだれもが共有しているが故に明確に説明することを要しない前提を改めて語る必要が生じてくる。領域を越えた、しかも実践への問いを持つ人たちに伝える言葉を探る経験は、それぞれの専門職がパブリックな表現を鍛えていく機会として重要な意味を持つことを、ラウンドテーブルの実際の積み重ねを通して私たちは実感してきている。ラウンドテーブルというセッションは、各自の領域をクロスして実践を問い深めるチャンスとなり、そして専門家の文化をパブリックなコミュニケーションと結ぶ可能性を持っている。

パブリックなコミュニケーションという課題 持続を支える記録と機構

公共的なコミュニケーションと個別のコミュニティの価値を結ぶという大きすぎる課題は、しかし、民主社会における専門職、とりわけ公教育を担う専門職にとって避けて通ることの出来ない課題である。理念としてのみ語られることの多いこの課題に、ラウンドテーブルは、実効性のある手がかりを与える可能性があるのではないかと。語り合う 34 の小さな渦、そこでの語らう声が輻輳する広場に一人の当事者として参加しながら、そして 20 名余の小さな実践交流からはじまったラウンドテーブルの 9 年の展開を振り返りながら、そう考えは始めている。

ラウンドテーブルの 4 重の意味

4Dimensions of Round Table Cross Session for Reflection in and on Longitudinal Process of Practice

- I 長い実践の展開をともに跡づけ、省察する。
Co-reflection in and on longitudinal process of practice
- II 個々の実践コミュニティを超えて、実践の展開を探り、照らし合う。
Boundary crossing collaborative inquiries of longitudinal practice
- I, II → 省察的実践者としてのモードを形成する上で不可欠のサイクル
- III 実践と実践、分野と分野を結びパブリックな省察的コミュニケーションの文化とコミュニティを培う。
Cultivating Communities of Public and Reflective Learning
- IV 省察的実践者としての専門職学習コミュニティを支える省察的機構へのチャレンジ
Challenge for Reflective Institution for Sustainable Development of Professional Learning Communities for Reflective Practitioners

(柳澤 昌一 『教職大学院ニューズレター』 No.11 2009.3.31)

実践研究福井ラウンドテーブルの歩み 2001.3-2020.2

- 2001.3.17-18 春のシンポジウム ラウンドテーブル 教師の実践的力量形成をめざして
木岡一明・寺岡英男 (この回は教師教育をめぐる 20 人程度の研究会であり、実践を聴き合う会ではなかった)
- 2001.11.10-11 実践研究：福井ラウンドテーブル 省察的実践を支える協働 (第 1 回)
For Reflective Practice, Professional Development, and Organizational Learning. 第 1 回目の実践研究福井ラウンドテーブルが開催される。(参加者 20 数名) 京都ユースホステル協会 福井市公民館主事 つむぎの会 ゆきんこ共同保育園 福井大学附属小学校 福井大学教育地域科学部児童館プロジェクト・探求ネットワーク
- 2002.3.16-17 実践研究・事例研究ラウンドテーブル(第 2 回) 高木展郎・大田邦朗・藤原文雄・石川英志
フレンドシップ事業福井ラウンドテーブル 同日開催 探求ネットワークのラウンドテーブル ～現在に至る

2002.7.13-14	実践研究：福井ラウンドテーブル（省察的実践を生み出す 学び合う組織を編む）（第3回）
2003.3.15-16	実践研究・事例研究ラウンドテーブル（第4回） シンポジウム 教師教育における専門職大学院の可能性を探る 辻野昭・葉養正明
2003.7.12-13	実践し省察するコミュニティ 実践研究：福井ラウンドテーブル（第5回）
2004.3.13-14	学校改革実践研究福井ラウンドテーブル（第6回） 秋田喜代美ほか
2004.7.3-4	実践し省察するコミュニティ：実践研究福井ラウンドテーブル2004（第7回） 2004.8 教育のアクションリサーチ研究会が始まる（於熱海～2009） 2005.1 実践研究東京ラウンドテーブル始まる（於早稲田大学）～現在に至る
2005.3.5-6	学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2005（第8回 参加者100名超） 国際シンポジウム Ann Liebermann 横須賀薫 佐藤学 於国際交流会館
2005.7.9-10	実践研究福井ラウンドテーブル2005（第9回）
2006.3.4-5	学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2006 フェニックス・プラザ（第10回） 田中孝彦・石川英志・新田正樹・上野ひろ美・白益民・松木健一・牧田秀昭
2006.7.1-2	実践研究福井ラウンドテーブル2006（第11回）三輪建二・倉持伸江・松木健一・水野篤夫 兼日本社会教育学会東海北陸研究集会
2007.3.3-4	学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2007（第12回）渡邊満・無藤隆・松木健一・新田正樹 2007.4 福井大学教職大学院の準備期間が始まる
2007.6.30-7.1	実践研究福井ラウンドテーブル2007（第13回）藤本 寛巳・淵本幸嗣・寺岡英男
2008.3.1-2	学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2008（第14回）横須賀薫・新田正樹・松木健一・Jae-Hoon Yu
2008.6.28-29	実践研究福井ラウンドテーブル2008（第15回）人見久城・筒井潤子・寺岡英男・岸野麻衣・向当誠隆
2009.2.28-3.1	学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2009（第16回）稲垣忠彦
2009.6.27.28	実践研究福井ラウンドテーブル2009（第17回）5つの領域：専門職として学び合うコミュニティ （分野ごとのセッション始まる）
2010.2.27-28	学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2010（第18回参加者300名前後）鈴木寛 Catherine Lewis
2010.6.26-27	実践研究福井ラウンドテーブル2010（第19回）：学校・コミュニティ・特別支援・医療看護
2011.2.26-27	学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2011（第20回 参加者300名を超える）門脇厚司・森透
2011.6.25-26	実践研究福井ラウンドテーブル2011（第21回）松本謙一・勝野 正章・木原俊行・三輪建二
2012.3.3-4	実践研究福井ラウンドテーブル2012 spring sessions（第22回）（名称を変更する）
2012.6.23-24	実践研究福井ラウンドテーブル2012 summer sessions（第23回） 参加者450名を超える 兼日本社会教育学会東海北陸研究集会
2013.3.2-3	実践研究福井ラウンドテーブル2013 spring sessions（第24回）教師教育改革コラボレーションとの共催
2013.6.29-30	実践研究福井ラウンドテーブル2013 summer sessions（第25回） 11.30-12.1 実践研究東京ラウンドテーブル2013 winter sessions（明治大学） 2.8 宇都宮大学学校活性化フォーラム（宇都宮大学）1.25 実践研究ラウンドテーブル in 静岡（静岡大学）
2014.3.1-2	実践研究福井ラウンドテーブル2014 spring sessions（第26回）参加者550名を超える
2014.6.21-22	実践研究福井ラウンドテーブル2014 summer sessions（第27回） 11.8-9 教育実践研究フォーラム in 長崎大学、11.23 実践研究ラウンドテーブル in 静岡（静岡大学） 11.22 大阪教育大学 スクールリーダーフォーラム、12.6-7 実践研究東京ラウンドテーブル（明治大学） 2.14 宇都宮大学学校活性化フォーラム、3.7 教育実践福島ラウンドテーブル

- 2015.2.27-3.1 実践研究福井ラウンドテーブル 2015 spring sessions (第 28 回) 参加者 700 名を超える
- 2015.6.26-28 実践研究福井ラウンドテーブル 2015 summer sessions (第 29 回)
- 11.21 大阪教育大学スクールリーダーフォーラム、11.23 実践研究ラウンドテーブル in 静岡(静岡大学)
- 11.28-29 教育実践研究フォーラム in 長崎大学、12.6 実践研究東京ラウンドテーブル(明治大学)
- 12.19 教育実践福島ラウンドテーブル、2.13 宇都宮大学学校活性化フォーラム、
- 2.19-20 実践交流ラウンドテーブル NARA 2015
- 2016.2.26-28 実践研究福井ラウンドテーブル 2016 spring sessions (第 30 回) 参加者 800 名を超える
- 生徒ポスターセッションを開催
- 2016.6.24-26 実践研究福井ラウンドテーブル 2016 summer sessions (第 31 回) 参加者総数 547 名
- 7.8 記念講演&シンポジウム(和歌山大学教職大学院ラウンドテーブル)
- 11.12 大阪教育大学スクールリーダーフォーラム、11.23 実践研究ラウンドテーブル in 静岡(静岡大学)
- 11.5-6 教育実践研究フォーラム in 長崎大学、12.10-11 実践研究東京ラウンドテーブル(明治大学)
- 2.10-11 実践交流ラウンドテーブル NARA 2015
- 2.11-12 宇都宮大学学校活性化フォーラム
- 2017.2.17-19 実践研究福井ラウンドテーブル 2017 spring sessions (第 32 回) 参加者 800 名を超える
- 特別企画「中等教育特別フォーラム」「乳幼児教育フォーラム」を開催、省察実践学会の発足
- 2017.6.23-25 実践研究福井ラウンドテーブル 2017 summer sessions (第 33 回) 参加者総数 566 名
- 10.14 信州ラウンドテーブル(信州大学教育学部附属学校園)、10.15-21 マラウイラウンドテーブル
- 11.11 大阪教育大学 スクールリーダーフォーラム、11.11-12 教育実践研究フォーラム in 長崎大学
- 12.9-10 実践研究東京ラウンドテーブル(明治大学)
- 2018.2.22-24 実践研究福井ラウンドテーブル 2018 spring sessions (第 34 回) 参加者総数 627 名
- 2018.6.22-24 実践研究福井ラウンドテーブル 2018 summer sessions (第 35 回) 参加者総数 476 名
- 10.20 信州ラウンドテーブル(信州大学教育学部附属学校園)、10.23 マラウイラウンドテーブル
- 11.17-18 教育実践研究フォーラム in 長崎大学、11.22-23 教育実践研究フォーラム in 奈良
- 12.15 実践研究ラウンドテーブル in 静岡大学
- 12.22-23 実践研究東京ラウンドテーブル(東京学芸大学)
- 2.9-10 宇都宮大学教育実践フォーラム
- 2019.2.15-17 実践研究福井ラウンドテーブル 2019 spring sessions (第 36 回) 参加者総数 930 名
- 2019.6.21-23 実践研究福井ラウンドテーブル 2019 summer sessions (第 37 回) 参加者総数 426 名
- 9.28-29 札幌ラウンドテーブル、10.23 マラウイラウンドテーブル、
- 11.16-17 教育実践研究フォーラム in 長崎大学、11.9 教育実践研究フォーラム in 奈良、
- 12.15 実践研究東京ラウンドテーブル(明治大学)
- 2.8-9 宇都宮大学教育実践フォーラム
- 2020.2.15-16 実践研究福井ラウンドテーブル 2019 spring sessions (第 38 回) 参加者総数 800 名程度
- 3.3-4 ウガンダラウンドテーブル

福井大学連合教職大学院が実践する教育改革グローバル・コミュニティへの^{いざな}誘い ラウンドテーブルの広がりと深まりを通して

福井大学連合教職大学院准教授 木村優

新しいミレニアムが幕をあけたばかりの2001年3月、教師教育にかかわる20名程の実践者・研究者が福井に一堂に会し、互いの教育実践研究を交流し合う研究会が催されました。この研究会のテーマは「教師の実践的力量形成をめざして」でした。このテーマのもとで解き放たれた熱い議論が、現在、福井大学連合教職大学院が毎年2月と6月に開催している実践研究福井ラウンドテーブルを生み出しました。

あれから十数年間、福井大学連合教職大学院は福井県内外と国内外の学校や教育機関との交流・往還を積み重ねてきました。そして、21世紀の教育の実現に向けた学校と教師の挑戦を支援すべく、実践研究福井ラウンドテーブルを大黒柱にして実践コミュニティを耕し続けてきました。

実践研究福井ラウンドテーブルでは会を重ねるごとに、参加者の実践報告が多様な色彩を帯びていています。ラウンドテーブルの創世記には数人の教師たちによる実践報告に限られていました。しかし現在では、教師の教育実践の報告や学校改革の挑戦過程から、教育研究者による学校との協働研究、医療・福祉における省察的实践への挑戦、学生・院生の大学（院）におけるプロジェクト学習の展開、地域の人々による学校・家庭の教育支援、海外学校での新しい教育実践への挑戦、そして、小中高生による自らの学びの軌跡についての報告に至るまで、多彩な実践が毎回のラウンドテーブルで交流されているのです。

この間、教育研究の飛躍的な前進を足がかりとしながら、「教育の質保証」と「学びの転換」を目指したさまざまな施策が矢継ぎ早に打たれるようになりました。アクティブ・ラーニング、チームとしての学校、コンピテンシー・ベース、カリキュラム・マネジメント、主体的・対話的で深い学び等々といった新しい改革用語が流布するように、学校と教師、そして子どもたちには実に多くの変化が求められています。これらの求めは、超スマート時代(Society5.0)、超AI時代、VUCAワールド等と呼ばれる新しい時代における、あらゆる個人とすべての社会の幸福を実現するための、私たち人類の挑戦の現れと言えるでしょう。

このような変化の激しい時代の教育改革期では、学校、教師、子どもたちの豊かな学びと確かな育ちをサポートする機構が必要になります。学校も教師も子どもも、それぞれが孤立するのではなく、つながり合い、支え合い、協働することで変化に向けた挑戦が可能になるのです。そこで、福井大学連合教職大学院は現在、21世紀のあらゆる実践者、研究者、そして子どもたちの挑戦を支え促すための省察的機構としての実践コミュニティとして成熟を遂げようとしています。

省察的機構としての実践コミュニティは、そのコミュニティに参加するメンバーの、文字通り「実践の省察」を支え促すことを最重要のビジョンとして描きます。このビジョンを基盤とした実践研究福井ラウンドテーブルでは、そこに参加する日本全国・世界各地の実践者や研究者は当然、それぞれ福井大学連合教職大学院とは異なるコミュニティ、あるいは複数コミュニティに属していて、それぞれのコミュニティの中で変化を生み出す新たな実践に挑戦しています。つまり、実践研究福井ラウンドテーブルは、イノバティブ（革新的）なローカル・コミュニティが集合する大きなコミュニティの「垣塙（るつぽ）」なのです。

もしも、このコミュニティの中で数多くあるローカル・コミュニティがイノバティブな実践をベースにして結びつき、そこでコミュニティ間のネットワークが広がり、協働が加速すると、いったい何が起きるのでしょうか。それはおそらく、誰も見たことのない新しい知の創造であり、新しいかかわりの現れです。この新しい「知」や「かかわり」のダイナミクスが大きくなるほど、広がるほど、現代社会を取り巻く困難や未来社会に予測される問題を突破するいくつかの「ソリューション（解）」が生み出される可能性が高まります。ただし、「知」と「かかわり」のダイナミクスを大きくし、それらのイノベーションの質と価値を深めるためには、「戦略」が必要になります。ただ指を咥えて待っているだけでは、ダイナミクスやイノベーションは起こらないのです。

福井大学連合教職大学院では、これまでの実践研究福井ラウンドテーブルの展開で結びつきを強めた

いくつかのコミュニティと連携して、分散型コミュニティのデザインに着手し始めました。もしも、複数のローカル・コミュニティが共通の理念やビジョンのもとで、「実践し省察するコミュニティ」に昇華することができれば、そして、そこで互いの課題や問題を見つけ出し、それらの解決策を考え出して共有可能な「知」を蓄積することができれば、それぞれのコミュニティが分断することなく連動して各地の「挑戦」を支え合い励まし合うことが可能になると考えたためです。

すなわち、日本全国・世界各地にあるローカル・コミュニティを結びつけて、各コミュニティの相互作用による変化を生み出すために、複数の境界をまたいでメンバーが学び合うことができる分散型のコミュニティ構造をデザインしていくのです。福井大学連合教職大学院の分散型コミュニティへの挑戦とはつまり、現代社会と未来社会に生きるすべての人々の学びと育ちを支える、教育改革のグローバル・コミュニティを築く戦略なのです。

2014 年度から、福井大学連合教職大学院との連携協働に基づき、長崎、大阪、静岡、東京、宇都宮、福島でラウンドテーブルが開かれるようになりました。その後、ラウンドテーブルは奈良や長野でも産声をあげ、各地の学校の校内研修にも広がっていきます。2017 年度には福井大学連合教職大学院と JICA との連携を基盤として、アフリカのマラウィでラウンドテーブルが始まりました。日本各地そして世界

のラウンドテーブルで引き出されはじめた教師たちの教育への熱誠、子どもたちの学びへの希望、そしてすべての人々の幸福への追求が、新たな省察的機構としての実践コミュニティを各地に創発していくことになることでしょう。

福井大学連合教職大学院ではこれまでも現在も、私たちのコミュニティ、そして分散型のグローバル・コミュニティに参加くださるあなた（ピア）を求めています。ぜひ、私たちとのかかわりを通して、そして実践研究福井ラウンドテーブルを通して、21 世紀を革新する教育のあり方についてともに考え、すべての人々が幸福を追求できる未来社会をともに築いていく、この挑戦に多様多層に同行いただけると幸いです。

1 あるテーマについての関心や熱意等を共有して、それぞれが所属する分野・領域の知識や技能を相互に持続的に交流し、深めていく集団や組織のこと（ウエンガー・マクダーモット・スナイダー, 2002）。

2 現代社会の特徴を表す 4 つの言葉: Volatility (不安定)、Uncertainty (不確実)、Complexity (複雑)、Ambiguity (曖昧) の頭文字をとった造語。

3 コミュニティの組織学習を支え、コミュニティのメンバーの実践の省察を励ます組織＝機構のこと（ショーン, 2017）。

Archive

—アーカイブ—

ラウンドテーブル 2014 Spring Sessions に参加していただいた方の報告を、Newsletter No.61 (14.4.6) からご紹介いたします。

Newsletter No.61 (14.04.06) より

ラウンドテーブルに参加して

平成25年度修了生／長野県岡谷市立岡谷南部中学校 召田幸司

長野県から長期研修として福井大学教職大学院に派遣された1年間の研修も、3月のラウンドテーブルをもってすべてが終了することになる。長期実践報告を2日目に報告させてもらう経験もした。自身の実践を省察したり、福井で安居中と至民中に入らせてもらって学んだことを記したりしたものである。その報告が一通り終わり、いくつかの意見が出される中で、改めて考えさせられた質問があった。北海道の札幌市教育委員会で活躍されている方からのものだ。「今まで実践の中で大切にしてきたことが、福井にきたことでどう考え方が変わったのか」というものだ。一瞬考えたが、1日目にZone Aのシンポジウムで語られた至民中学校淵本校長先生から教えられたことが浮かんできた。

私は長野県から派遣される時から3つのテーマをもっていた。それは「子ども同士をつなぐ学校づくりをどう進めていけばいいのか」、「教員同士をつなぐ学校づくりはどう展開していけばいいのか」、「地域と子どもをつなぐ学校づくりはどう仕組んでいけばいいのか」である。こういったテーマで安居中学校で生活させてもらっていると本当にいくつもの学びが見えてきたのである。しかし、10月から入った至民中学校では、このテーマではないことにシフトした。それは「安心・安全な学校づくりを進めるにはどうしたらいいのか」である。生徒指導上の様々な問題を抱えていた至民中学校では、まずは「安心・安全な学校づくり」が先決だったからである。そん

な現状だった至民中学校も、現在は確実に生徒指導上の負のスパイラルから脱出し、次のステップへと移行している。それはいったいどこにあったのだろうか。そのことを考えると簡潔に言えないが、おそらく学校長と職員が学校づくりのビジョンを共有し、具体的なアクションを次々に打ってきたからだろうと思う。もっと簡単に言ってしまうと、職員とベクトルをそろえたからだろう。しかしこれは実に難しいことでもある。淵本校長先生から教えてもらったことはここにある。

私は「あるべき子どもの姿」、「理想とする学校像」といったものが先にあり、これに「現状」をどう近づけていくかということで、今までの実践をしてきたように思う。しかし、淵本校長先生は、「課題把握」という「現状」認識から入り、学校づくりのベクトルを職員と共有していくのである。「子ども同士をつなぐ学校づくり」も「教員同士をつなぐ学校づくり」も「地域と子どもをつなぐ学校づくり」も大切なことであり、残りの20年ほどの教員人生も引き続き追究していきたいと考えている。しかし、「現状」認識から入って先生方と協働して学校づくりを推進していきたいと今は思うようになった。これが福井で学んだ一番大きなことだと思っている。3月のラウンドテーブルでこのことを意識化できたことが、長野に帰ってからの大事な指針になると思う。

3月ラウンドテーブル

教職専門性開発コース2年／啓新高等学校 宮川 翔太

3月1日。新たな月の始まりの朝を迎えまず向かったのは、私の実習先である啓新高等学校の卒業証

書授与式であった。卒業できる嬉しさと寂しさが入り混じった複雑な表情で登校してきた卒業生たちだ

ったが、式が終わるころには多くの生徒が涙を流していた。泣きながら体育館を去っていく卒業生たちは、この3年間で啓新高校で過ごしてきたよかったと思えるからこそ思いが溢れてきたのだろう。生徒が啓新でよかったと思って卒業できることに、生徒とともに悩み、喜び、生徒たちの未来を見据えて支え導いてきた、先生方の情熱を感じるとともに、子どもの未来のために実践していくことの大切さを改めて感じ、素敵な時間を過ごした。

素晴らしい卒業式の余韻に浸るのも束の間、午後からはラウンドテーブルに参加した。6月に参加したラウンドテーブルとは違い、今回は報告もあったため、緊張するよりは楽しもうという気持ちで臨むことができた。Session I のポスターセッションでは ZoneB で発表し、発表後は ZoneD に参加した。他大学の教職大学院、また教職大学院の設置を検討している大学の教授方がたくさんお見えになり緊張したが、みなさん興味を持って耳を傾けてくださった。途中で、みなさんの興味はお隣の松木先生のポスター発表へと移ってしまったが、教職大学院での私たちの学びを語ることができたと思う。教職大学院の関心の高まりを肌で感じた発表だった。自分たちの発表を終えて1階に降り、通る隙間もないほどの人数の多さに圧倒されながら、富山県立堀川小学校、勝山北部中学校、附属小学校のポスター発表を聴いた。ESD（持続可能な発展のための教育）をキーワードに、子どもに委ね、学び合い、関係づくりを模索するところから子ども同士のつながり、子どもと地域社会のつながりまで見据えた取り組みを紹介していただいた。

Session II、IIIでも引き続き、ZoneD に参加した。ZoneD のテーマは、「授業改革の扉を開く - 問いはどこから生まれるのか - 」であった。5人の院生、先

生方の実践報告を聞き、とくに石川県能美市立寺井小学校の北川先生の実践報告は、私にとって非常に印象的だった。子どもが問いを持ち、その問いの解決のために地域を駆け回り、行政をも動かすまでの展開の流れのスムーズさに何より驚いた。そして先生の実践の語りから見える、自分たちの問いを解決しようと生き生きと学ぶ子どもたちの姿、子ども中心で学びが発展していくその様子に胸を打たれた。それぞれの報告のあとに設けられていた小グループでのセッションでは、「問いはどこから生まれるのか。子どもからか。教師からか。子ども自身から問いが出るとは限らない。自然発生的な問いとは何か。生まれた問いをどうつなぎ、発展させていくか。」など、問いについて考え話し合っただけで新たな問いを生みだし、深め合っていた。私はこのとき、実践報告の1時間、1単元に視点がおり、授業として、教科として問いはどこにあったかを見ようとし、話していた。実はラウンドテーブルに参加するまで、ESD というキーワードもいまいちわからなかったが、先生方の報告、セッションを通してじっくりと考えた結果、私なりの解釈を得ることができた。

「問い」は、生きていく上で必ず持つものであり、社会や地域など、暮らしに身近なところにある。身近にある問いにどれだけ気づけるか。そして、その問いに出会ったときに解決するための方法を子どもたちは学んでいる。彼らが大人になったときに、問いの対処、解決の仕方を学んだことを社会の発展のために活かしていく。ここまでを見通した教育が「持続可能な発展のための教育」なのだろうと解釈した。子どもたちの学びを支えていく教育が、子どもたちの成長、社会の発展へと大きな役割を持っていることを再認識できたセッションであった。

Zone A

「実践し省察するコミュニティ」

実践研究福井ラウンドテーブルに参加して

長崎県佐世保市立江迎中学校 教諭 久住呂眞由美

去る3月1日(土)2日(日)に福井大学のラウンドテーブルに参加する機会を得た。長崎からイメージする「福井」は美しい若狭湾を囲む雪深い里一が、新幹線からサンダーバード号に乗りついで降り立つ

た福井は、見事に雪のないすっきりとした風景。聞けば、珍しく雪のない年だという。ちょっとがっかりしつつも、早速福井大学へ向かう。雪つりの見事な庭園の木々を眺め、午後の ZoneA 学校 Session I

ポスターセッションと SessionⅢフォーラムで江迎中学校が4年間取組んできた「学びの共同体」の研究実践について報告をするため、最後の打ち合わせを行う。参加した3名、皆緊張した面持ちであった。

12:50の開始時間とともに各校ポスターの前で報告が始まった。最初に耳を傾けたのは、福井大学教育地域科学部附属中学校の実践。何より興味深かったのは、協働研究を支える部会を時間割上に設定し、年間30回程度は行っているという点。その構成メンバーは教科の枠を外し在籍年数も多様で4~5人、部会内の気軽な授業公開を頻繁に行い、悩みや疑問について語り合う会と説明されていた。ここでの問題提起が全体の研究企画につながっていると聞き大変参考になった。続いて、佐世保の早岐中学校の取組を聞き、いよいよ我が校の報告。前研究主任が熱弁を振るい、参会者から多数の質問も出て、あっという間に15分が過ぎた。全学年で取組んでいるコの字の座席、生徒と生徒をつなぐ教師の役割、何より

学校全体で同じ方向に向かって研究を進めている姿勢が高く評価されていたように思う。

SessionⅡはシンポジウム「世代を超えて協働する学校」に参加。福井市至民中学校の校長・教頭先生より学校を組織として運営することについての実践と福井大学教職大学院拠点校である東京都板橋区立赤塚第二中学校の授業改善を柱とした協働研究の実践の報告を聞いた。どの中学校も抱えている「荒れ」の現実に対して校長・教頭、中堅教員と立場は違えど、〈学力保障〉の面から「世代を超えた学校作り」に模索されている姿に深く共感を覚えた。

SessionⅢフォーラムと次の日のSessionⅣは、各会場に別れ、5・6人のラウンドテーブル方式で報告を聞き、議論し共有するというスタイル。小・中・高・養と普段交流の少ない校種の異なる先生方の熱心な実践と様々な意見を拝聴し、大変刺激を受けた。ここで学んだことは、研究には終わりが無いということ。自校の改善に協働して取組むためにはどうしたらよいか、よく考え実践の場に生かしていきたい。

Zone B

「福井ラウンドテーブル:Zone B 教職大学院をイノベーションする」に参加して

新潟大学 一柳智紀

教職大学院とはなんなのだろうか。これまで様々な形で見聞きしてきたものの、よくわからないままであった。そして、今回のラウンドテーブルに参加しても、やはりまだよくわからない、さらに問いが生まれた、というのが本音である。それでも3つのセッションを通して先生方のお話をうかがう中で、たくさんのことを学ばせていただいた。

その1つが、理念やビジョンの共有の大切さとそれを実現する仕組みである。今回のラウンドテーブルに参加して、改めて「教師を育てる」、「学び続ける教師を支援する」、「実践と省察の往還」、「養成＝大学、研修＝学校・教育委員会という断絶した役割分担の克服」、「教育委員会と大学との連携・協働」といった言葉を幾度も耳にした。いずれも、教職大学院における教員養成の根幹をなす教職に対する認識であり、教員養成改革の理念・ビジョンである。ただし、これらは必ずしも共有され、自明のものではないとも感じていた。私自身、これらが意味する

ところを、実感を伴って理解することが未だにできていないことを改めて感じた。

これに関して、私がうかがった山梨大学や福井大学の実践で印象的だったのは、専門分野の異なる研究者教員と実務家教員とのティームティーチングを基礎としたカリキュラムの構想・実施や、現場の実践とその課題の共有、毎週のFDなど、教職大学院のデザインのなかに、ビジョンを共有していくための仕組みが幾重にも組み込まれ、互いに密接に結びついていることである。とりわけ、これらが上述の理念やビジョンを単なる題目として共有する場ではなく、絶えずその意味するところを実践に基づき省察していくという、プロセスを共有する場となっていることが印象的であった。だからこそ、大学教員も教育委員会も学校も、絶えず構成員が変化していく中であって、既存の輪に閉じこもることなく、ビジョンを共有しつつ、持続・発展していくことが可能になるのではないかと感じた。

一方で、ラウンドテーブルに参加することで新しく生まれた問いもある。その1つが、教職大学院での学びをどのように捉え、記述していくことが求められるのかということである。福井大学における今回のラウンドテーブルや長期実践報告書もその1つだろう。しかし、これらは院生が主体となった自身の学びのナラティブが中心である。教職大学院を出た院生がその後も学び続けることができるのか、マネジメント力はどのように成長・発揮されているのか、学校の課題はどのように展開・解決されているのか等々を、特に研究者教員はいかに捉え、記述し、発信することが可能だろうか。教職大学院そのもの

が革新的に発展している一方で、こうした教職大学院での学びを捉える視点や方法論は、まだまだ既存の枠組みに依拠している部分が多く、イノベーションの余地があるように感じた。ここにも、大学と学校・教育委員会の連携・協働が不可欠だろう。

このように、わからないことも含めて、さらに学びたい、学ばなければと感じる、とても刺激的な時間であった。先行事例に学びつつ、自らも実践と対話しながらいかにして「学び続ける教師を支援する」ことができるのか、探究していきたい。

Zone C

ラウンドテーブルに参加して

福井市至民中学校 サポート至民 杉本 久美子

一月、「しみんステーション」でのいつもの定例会において、先生から「3/1・2とラウンドテーブルが行われますので協力お願いします。」との話がありました。「ラウンドテーブル」がどのようなものなのか、説明を聞いても理解できませんでした。院生の方から、「毎週集まる定例会のような感じで取り組んでくださればいいですよ。」と言われ、私は軽い気持ちで参加させていただきました。

意見交換をしながら話し合うつもりで、テーブルの席に着くと、「これ迄の取り組みの経過・実践してきたことを報告してください。」と言われて戸惑ってしまいました。

初めに、大学生の方が資料を配り発表して下さいました。最初は活動グループでの意思の疎通が図れなくて困ったこと、しかし、企画事業が具体化していったときには努力が実ったという喜びと達成感を感じたこと、そして人と人とが繋がることで可能性が広がっていくと実感したこと、などという内容でした。私は、我々も同じような体験をしたな…、と思いつつ聞いていました。

次に、私の発表になりました。配る資料の準備もなく不安でしたが、おばさん根性で始めました。「サポート至民」は、来校する視察団の方達へのボラン

ティアガイドとして発足したこと、中学生と生産組合や地域の自主活動グループの方達と行った古代米の田植えや学校祭でのそば打ちのこと、生徒たち自らが企画した収穫祭でお世話になった方達にお礼の気持ちを伝えたこと、また、公民館主催の行事にも生徒たちが参加していることなど、発展的に展開していった6年間の活動を、思い出しながら取り留めもなく話しました。

不慣れな発表で分かりにくかったのではないかと、リーフレットなどの配布資料が必要だったのではないかと、事例をもっと具体的に報告したらより理解してもらえたのではないかと、など心配しましたが、教師でもなく学生でもない我々の学校との関わり方について、同席の方からお褒めの言葉を頂けたのがとても嬉しかったです。

「サポート至民」としてできることは、思いやりのある人、心豊かな人になってもらうための学びの場作りの為に、ただ一つ、校内外から「生徒たちの三年間を見守ること」しか無いのではないかと思います。そして今後も、地域の公民館、地元の人達、学校の先生方と、協働することを積み重ねてゆけたらいいなと思っています。

Zone D

与論町立与論中学校 教諭 今村 忍

福井ラウンドテーブルでの授業報告が決まってから、今の授業実践を振り返るいい機会となりました。研究公開のような感じの会になるのではないかと考えて構えていましたが、小グループの話し合いでは、ファシリテーターの方がうまく話を聞き入れ、振ってくれたおかげで、とても楽しく充実したものになりました。ところ変われば、考え方や教育方法も少し変わる。その違いが新鮮であり、自分の考えの幅を広げてもらったように思えます。

現在、与論中学校に 5 年間勤務しておりますが、与論島に来る前は、岐阜県との教育交流で 3 年間岐阜県の教員として勤務していました。岐阜県の教育を学び、自分なりに吸収して鹿児島に帰った訳ですが、県を越えるとそれぞれ教育方法に違いがあります。当然でしょうが他県の教育方法に合わせないといけないところも出てきます。「なぜ、どうして」と思うこともたくさんありましたが、その中で自分の考え方が広がっていきました。

今回、報告させていただいて、「問いとは？」と考えていくうちに教育というよりも哲学のような考えにもなっていました。自分の頭の中で考えるだけで、それをどう実践していくか問い続けることもしばしば。「問い」と聞くと難しく、また理論的に考えなく

てはいけないと思い、深く追求しようとしたのですが、答えは簡単ではありません。ただ、問い続けることが大切であり、自分を成長させてくれるものであることは確信しました。

同僚の教員から「先生どうでしたか？」と言われ、開口一番「楽しかったよ」という言葉が出てきました。その教員は本校で研修主任を担当し、校内研修でどうやったら意見が出るかと考えています。今回のラウンドテーブルでのことを話したら、「楽しそうですね。自分も行ってみたい」と言われたとき、「こんな研修を本校でもできないか」とふと考えました。時には、こういう研修をしていけば、教育は楽しいものであり、生徒たちに分かりやすく伝え、共に進んでいけるものと思います。ただ楽しいものにするためにはそれなりの努力の積み重ねが必要ですが。

「問い続けることは悩み続けること」と考えることもありましたが、「問い続けることは前に進むこと」とコーディネーターの富永氏が言われたことがとても心に残りました。

最後に、報告の機会をつくっていただいた福井大学教職大学院、そして研修視察を快く受け入れていただいた丸岡南中学校の方々に感謝申し上げます。

※ご所属は当時のものです。